

A Storm in the Tube

ロンドンチューブ環状線

ロンドンの地下鉄はチューブと呼ばれる。その名のとおり、丸くくりぬかれたトンネルの中を轟音をあげて電車が走る。
ニューヨークと違って治安が良いのもロンドンの自慢だ。設計は古いから車体はかなり揺れるけれど、
このネットワークを利用すれば、市内のどこにでも行ける。



小林 昭 写真

Photographed by Akira Kobayashi

古賀ゆずる ◆ コーディネート

Coordinated by Yuzuru Koga

何かを勉強しようと思えば、ロンドンという街は格好の素材に満ちている。美術、建築、ファッション、工芸、といった文化的な分野では、なんといっても蓄積がものをいう。美術館、博物館を丹念に歩きまわるだけで、何日間もかかるし、その成果も期待できる。しかし、新しいものを創りだそうとする、これまた違う力が必要となってくる。

簡単にいえば、歴史から創造へ、ということになる。シタイを歩くと、石や煉瓦造りの旧建築にはさまれてガラスとアルミの新建築がボツボツと芽を出している。チャールズ皇太子が本まで書いて悪口を並べた、現代風の街造りだ。しかし、これだけ、東京の無秩序ぶりに比べたら、整然と調和しているように見える。ここは昔からある種のエネルギー変換装置が働いていて、無秩序とか乱暴といった力を、きれいに整理整頓してしまうのかもしれない。

造形作家デン・キヤリントンの
ガラタエネルギー回収法

地下鉄サークル線のバービカン駅の近くにデン・キヤリントンのスタジオがあった。というより、それらしい古い二階建ての建物を捜し出でて、ギシギシときしむ階段を上つて乱雑にものが散らばる部屋に通され、初めてミが倉庫じやなく、作品のあるスタジオで、すすけたガラス窓の向こうにバービカン駅があった、というのが正しい。

そしてアン・キヤリントンに会った。彼女の名前は、東京でも知られている。東急文化村のオーフニング・イベントに参加した他、2回の来日がある。ここで、どんな作品を創っているのか? さうそく材料のガラタと間違えていた作品について聞いてみる。

「えーと、この大きいワタだけど」

ホリダの床に身長2メートル以上あるワが横たわっていた。顔を近づけてよく見ると、脚から背中から革靴をいっしょに集めて造られていた。

「なんだ、これ全部靴じゃない？」

「そう、揃えるのが大変だったのよ。みんなワ革でし。古いゴミから選んできたの。でも、色とか素材を選んでいくと、なかなか使えるのがなくて、材料集めにだいぶ時間がかかったわ」

ホントにブーツであれば、スリッパもある。ローファー、編み上げ、よくもこれだけ。彼女、大作主義なのだ。ひとつの作品を造るのに数か月はさら、一年以上かかってしまうこともあるらしい。このワ、彼女によつての姿かたちに戻ったわけだ。とにかく面白い、ワが寝ている隣の椅子には、金属製のエビがいた。気がつく、その仲間のサカナやカエルも。こわくわくと手にとりて見ると、これまた胴体が空缶、ハサミはブオーク、脚はスプーン、頭は靴型といった金物ばかりで造られている。

「こういう材料って、どこから集めるの？」
「まあ、全部ゴミといえはゴミだけど。スクラップ置場とかものによって色々なところがあるよ。そのエビなんて材料を集めていたら面白くなつてきて、サカナとか仲間を色々造って見たの」

「コは？ アレは？」 とたずねていつても、全部材料はゴミ、といつては失礼だから産業廃棄物や家庭からの廃品。名作はジーンズの一部分の布はしを州ごとにあてはめた巨大アメリカ合衆国地図。日本の主婦の趣味とは発想のスケールが違う。日本の若いアーティストでもゴミから作品を造る、といった作風はあるけれど、ちょっとハリーが違う。

話は変わるけれど、ロンドンの街や道路はいつ見てもキレイなものだ。ゴミなんか落ちていない。でも、ゴミ収集の方法は、ナマゴミ、可燃物、不燃物なんていうように分別収集しているわけではない。全部まとめてキレイにボイズ。市民道徳は尊敬するくらい高いけれど、エコジョーの意識は感じられない。良いところなのか、どうなのか。

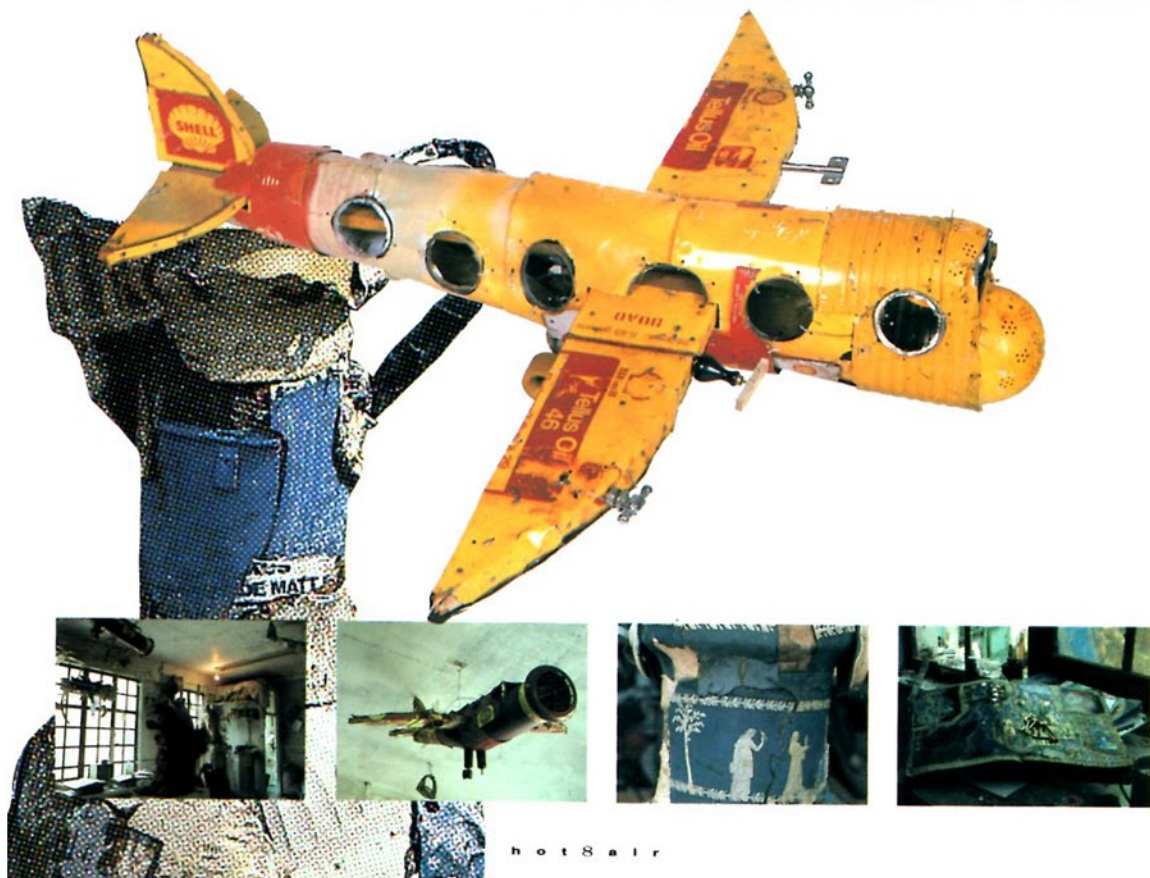
ともかく、アンはまた別のゴミを集めて次の大作にとりかかっていた。ほぼ実物大の馬の材料は、なんとヤシの実だ。丸い鼻、長い馬面、ふさふさのタテガミ、太く力強い首、全部ヤシの殻で造る。この立体造形の芯には針金と粘土が入れられている。彼女はロイヤル・カレッジ・オブ・アーティの出身だ。ロイヤル・アルバート・ホールの近くにあるこの芸術大学は権威がある。もちろん、それだけでなくアーティストやデザイナーの逸材を毎年送り出している名門校だ。そこで造形を専攻した彼女、基礎はしっかりしている。ヤシ殻の馬は今にも動きださそうにダイナミックで、生きている。

「材料のヤシ殻は友だちがヤシを扱う工場に勤めているから、そこから送ってもらっているの。一度にそんなに量が出ないから、これも少しずつ仕上げています。」
と彼女。大作家として立派なゴミの持ち方なのだ。それにしては、このスタジオは汚い。彼女が使う前は、この建物はインテリア内装業者のオフィスだったという。そのため、裏庭が広い。ちやうどバービカン駅と地下鉄線路を見下ろせるその裏庭に出てみると、錆びて朽ちたクルマ、誰かの巨大な作品なんかはいっぱい並んでいる。ガラタのテーマパークのようだ。

アンがロンドンの若いアーティストの典型といわけじゃない。むしろ、ユークなほうなんだろう。でも、圧倒的にパワフルで面白い。また日本へどうぞ。

この前日本に来た時、何か面白い材料は

A Storm in the Tube





Ann Carrington

アン・キャリントン Ann Carringtonは1962年ウインチェスター生まれ、87年にロイヤル・カレッジ・オブ・アートを卒業、本格的な作家活動に入る。スウォッチ展最優秀賞受賞はか大活躍。ギャラリーには委託せず、個人営業のアーティストである。54 Charterhouse St. Corner Hayne & Linsey St. LONDON ☎ 071-796-4019にある彼女のスタジオを訪ねれば作品は手に入る。A0サイズのカラーコピーによる作品は95ポンドだ



この人は、ローソクの科学で知られるマイケル・ファラデーと同じ年に生まれた。という事実を知ったのも、科学博物館でこの

偉大なふたりの科学者の生誕200年記念展を開かれていたからで、日本ではファラデーの名前は知っていても、バベッジはほとんど知られていないし、紹介されていない。知らなかった人は安心してください。ファラデー展に比べると、バベッジ展は少々地味だった。ガラスケースの中に目指すスチーム・コンピュータが納まっていた。真鍮と鋼鉄とガンメタル製の巨大な機械。高さ2.1メートル、幅3.4メートル、奥行50センチメートル。ギアとシリンダーが数十個積まれたシャフトが何列も並び、右側にはハンドルがいて、これで色々な関数計算をこなす、というのがバベッジの構想だったようだ。その仕組みからディファレンス・エンジン(階差機関)という呼ばれる、とふたりの白衣の紳士が実演しながら説明してくれるのだけれど、難しくてよくわからない。まわりに集まっている高校生や大人の見学者たちもわからないような、わからないような顔をしていたからこれはそれでいいのだ。

地下鉄サークル線のサウスケンジントン駅で下りて地下道を延々と歩く。出口は自然史博物館。その隣には地質学博物館。通りの向かいにはビクトリア&アルバート博物館がある。そして、イドパークに向かてゆるやかな坂の続く歩道を歩くと、左側の建物が科学博物館だ。ここに、スチーム・コンピュータが展示されている。

ビクトリア朝の科学者チャールズ・バベッジが設計図のみを残して未完となった最初のコンピュータが復元された、というニュースを聞いたのは91年の春だった。それがどんなものか、想像もつかなかっただけに、しばらくはそのことを忘れていた。アラスと突然思い出したのは、ウィリアム・ギブスン&ブルース・スターリングの共著によるSF『ディファレンス・エンジンの翻訳』が出版されたことだった。サイバー・パンクのふたりの若き巨匠による合作は、あの前世紀のコンピュータを題材としていたのだ。

チャールズ・バベッジは1791年生まれ、この時代に早くも自動計算機のアイディアを考案していた。1820年代からその実現に取り組み、業績半ばにして1871年没。

改めて簡単に説明を。原理は重いハンドルをグルッと回すと、一個のギアが回転し、それが一回の足算。といった具合に足算を積み重ねることで三角関係や対数、といった誰かがやる計算を機械的にやつてしまおう、という機械なのだそう。当時としては画期的な試みで、時の政界まで巻き込んで多額の投資がされたとい

ありましたか。」と聞いたら、嬉しそうに、小さな分厚いスクラップブックを広げてくれた。浅草の千社札やら可愛らしいものがいっぱい貼ってあった。そうか、このスクラップブック全体がこれまた作品に仕上げられている。やっぱりこの人、面白。

サイバー・パンクの時代に魅了た蒸気じかけのコンピュータ

実はふたりの白衣の紳士、白髪、レック・クリック氏と少し若いバリー・ホロウェイ氏は、このコンピュータを復元した技術者だった。バベッジが遺した精密なドローイングから、新たに設計図を起して、使う金属材料もビクトリア朝のものと同じにし、およそ4000個にも及ぶ重い部品を作り組み立てて1500年後に完成させた、という次第だ。